ハナ・ダストンの肖像とホーソーンのスケッチ
――インディアン虐殺、聖なる女性、マニフェスト・デスティニー

成田雅彦

アメリカ北東部、ニューハンプシャー州にボスカーウェンという小さな町がある。コントクック川とメリマック川という二つの川が流れ、合流した地点にできた川洲に古ぼけた女性の像が立っている（図1）。これは十七から十八世紀、アメリカがまだイギリスの植民地だった時代に生きたハナ・ダストンという女性の像である。ハナ・ダストンといっても、今は現地の人々や歴史愛好家以外知る人も少ない、半ば忘れられた人物といってもいいだろう。しかし、この像が一八七四年に建てられた時、それは女性のものとしてはアメリカではじめてとなる像であった。ハナ・ダストンは、ニューハンプシャー州を含むニューイングランド地方はもちろん、アメリカという国家にとっても重要な意味を持つ女性だったのである。

図1　ハナ・ダストン像、マーク・ノゼル氏撮影

ハナ・ダストンは、もともと現在のマサチューセッツ州ハーヴァーヒルにあったイギリス植民地の村に、レンガ職人で農夫の夫と八人の子供たちと暮らす普通の女性であった。しかし、一六九七年三月十五日、彼女の人生は一変す

る。カナダから南下してきたインディアン、アベナキ族の一隊に村が襲撃され、何人もの村人が殺害されて家々は火をつけられるのである。赤ん坊を生んだばかりのハナは、赤ん坊と乳母とともに捕らえられ連れ去られてしまう。しかし、ハナはただの悲劇の女性ではなかった。ハナは七週間後、果敢にも自分たちを捕らえたインディアンたちを殺害したのちメリマック川を下り、ハーヴァーヒルの我が家に逃げ帰ってきた。そういう女性だったのである。

このハナ・ダストンがなぜにそれほど重要な人物となったのか。この論考では、そのことを考えてみたい。ハナの重要性を考えることは、初期アメリカにおける女性の位置はもちろん、実は独立して拡大していくアメリカという国家の、いわゆるマニフェスト・デスティニーというイデオロギーの正体を炙り出すことにつながる。その点に焦点を当てながらこの人物を論じていきたいのである。また、この事件は十九世紀、何人かの作家によって作品化されることになった。ナサニエル・ホーソーン、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー、またジョン・グリーンリーフ・ホイッティアなどがハナの事件を描いた。本論後半ではその中からホーソーンのスケッチ的作品を取り上げ、アメリカの歴史と文学との結びつきについても考えてみたい。これらの問題を考えてみることは、現在アメリカで起こっていることについても貴重な理解の鍵を与えてくれるように思えるからである。

Ⅰ　ハナ・ダストンの事件

ハナ・ダストンとその家族をめぐる物語の顛末は、およそ以下のとおりである。ニューイングランドのイギリス植民地がフランス植民地と抗争したキング・ウィリアム戦争の最中の一六九七年三月十五日、マサチューセッツ湾植民地の人口三百人ほどの村、ハーヴァーヒルがカナダ、ケベック地方から来たインディアンでフランスと同盟を結んでいたアベナキ族の襲撃を受けた。二十七人の植民地人が死に、十三人が捕虜として捕らえられた。その中にいたのがハナ・ダストンである。

ハナは当時三十九歳で夫トマスとの間に九人の子供があった（Atkinson, 42）。六日前、赤ん坊マーサを生んだばかりであった。インディアンたちはこの産後の女性宅を襲ったのである。夫は当時、家から離れていたがこの騒ぎを聞きつけて家に向かった。妻と子供を救い出そうとしたものの、インディアンたちはすでに家に入ろうとし、やむなく妻と赤ん坊を置いて家にいた七人の子供とともに難を逃れた。しかし、インディアンたちはハナの家に火をつけた。ハナは幼子を抱えて乳母のメアリー・ネフとともに捕虜となり、荒野へと連れ去られる。ハナがのちにこの事件を最初に書きとめたコットン・マザーに語ったところによれば、家を出たばかりのところで生後わずか六日のハナの幼子マーサは、インディアンによって木に頭を打ちつけて殺されたという（Mather 635）。

やがて捕虜たちは長い行進を強いられる。そして、あるインディアンの家族に振り分けられる。ハナとメアリーは十二人の家族（その中にはすでに二年前に捕虜として捕らえられた十四歳の白人の少年サミュエル・レナードソンもいた）に入った。そして、さらに北へと連行された。ある町につけば、彼女たちは身ぐるみをはがれ、鞭打たれることになると聞かされた（Mather 636）。

図 2 「インディアンを殺すハナ・ダストン」コルビー大学美術館蔵

四月三十日、この家族が現在ハナの像が立っているボスコーウェンの川洲にいた時に、ハナはメアリーとサミュエルを誘って反乱を起こした。インディアンの家族が眠っている間に、ハナは斧を振り上げ二人の男のうち一人を殺し（もう一人はサミュエルが殺した）、さらに二人の女、それに六人の子供を殺したのである（図2）。捕虜にしようと生かしておいたインディアンの子供一人と、もう一人怪我を負った女は逃げたという。当時、植民地人とインディアンの抗争が相次いだこともあり、植民地政府はインディアンを殺害することを奨励し、殺害の証拠としてその頭の皮を持ってくれば、それに対する報奨金を与えるという、なんともおぞましい制度があった。ハナは当然このことを知っており、殺害の後、その頭

の皮をはぎ持ち帰っている。ハナとメアリー、そしてサミュエルはその場を離れ、カヌーでメリマック川を下って故郷のハーヴァーヒルに戻った。捕虜になってから、およそ七週間後のことであった。

ハナは女性だったので、男にのみ認められているインディアンの頭の皮とひきかえに報奨金を請求することはできなかったから、夫のトマスが申請し、めでたく報奨金を手にしたとされる。この恐ろしい事件は当時のイギリス人植民地でも評判になり、ハナは有名な英雄的女性ということになった。コットン・マザーがまずハナから直接話を聞き、その話を三度出版している。三度目がマザーの名高い著作『マグナリア・クリスティ・アメリカーナ』（*Magnalia Christini Americana*, 1702）に記されたもので、これが、今日までこの事件のいわば定説版記録となっている。マザー以外にも、当時有名なセイラム魔女裁判（一六九二年）の判事でもあったサミュエル・スウォールなどが日記の中でこの事件に言及している。

これは、確かに人々の耳目を集める事件であり、インディアンとの抗争が絶えない植民地社会にあっても特異な事件として記憶された。しかし、この事件が興味深いのは、その劇的インパクト以外にもう一つ別の理由がある。この事件は、一六九七年の事件直後は注目を浴びたものの、次の百年以上、十八世紀の間中はほぼ全く忘れ去られていた。しかし、十九世紀初めになると突如としてアメリカ社会の中で再び注目を浴びる事件となったのである。一八二〇年代から八〇年代まで、ハナ・ダストンに関する出版物は大量に現れるようになり（Cutter 14）、彼女を記念する像が主なものだけで三つ建立された。

一体何が起こったのか。一度、忘却の淵に沈んでいった歴史上の事件が掘り起こされ、新たな力をもって国民の間に流布し、その記念碑まで作られる。人々の中にその記憶を永続化させようとした動きが醸成されたことにはどんな理由があったのか。それは考慮に値する問題である。なぜなら、それはアメリカ人の精神の中におけるインディアンの問題、女性の意味、帝国主義的暴力、国家の意味付け―そうした重要な問題を考える上で大きな示唆を与えるからである。

ハナ・ダストンは、十九世紀のアメリカで歴史の忘却の中から救い出される必要があったのである。それは、とりわけアメリカ白人のインディアンとの長い凄惨な戦いがあらかた終焉して、インディアンは居留地へと追いやられ、白いアメリカが圧倒的勝利を確定した時代の精神との関連の上に考えてみることができる。十七世紀以来、白人はヨーロッパからアメリカにやってきて先住のインディアンたちから土地を収奪し、その過程で途方もない数のインディアンたちが虐殺され消えていったのは周知の事実である。これはもちろん、インディアンたちにとって決して受け入れることのできない苦しみと不条理の歴史だった。その苦しみは筆舌につくし難いものがあり、その後のインディアンたちの歴史にも長い影を落とし、現在にいたるまで回復できないほどの傷を与えている。しかし、暴力というものはそれを受けた側のみならず、与えた側をも無傷のままではおかない。勝者であったはずのアメリカの白人たちもまた、虐殺の返り血を浴びるように、その魂には消し難い傷を負っていたのである。

この事実は、インディアンの負った傷や悲劇に比べれば、注目されることが少ない。先住民たちの苦しみの巨大さと深刻さを思えば、白人の心の傷などものの数ではないという議論もあるだろう。そして、それは否定できない事実である。しかし、アメリカの白人たちは、その罪を簡単に忘却することはできなかった。その罪を無意識の淵に抑圧しながら、新しい大陸で自分たちの国家を作っていくしかなかったのである。十九世紀になると、その困難はより鮮明に感じられるようになった。なぜなら、アメリカ白人政府のインディアンたちに対する非道が、白人自身によって批判されるようになっていくからである。

バーバラ・カターは特に一八一二年の米英戦争後、アメリカでは人道主義的で温情を重視する新たな感性が生まれたとしている（Cutter 15）。人々の苦しみや痛みに注目が集まり、インディアンに対しても単に自分たちの敵というのではなく、白人が加えてきたその非道さに目が向けられるようになった。これは北部で顕著であり、当時南部で行われていたチェロキー族やクリーク族に対する強制移住は、インディアンたちの苦しみに対して無感覚な不道徳的な行いであり、それは有徳の国家たるアメリカと矛盾する態度である、という姿勢が鮮明に取られるようになる（Cutter

15)。

例えば一八二九年、「合衆国の慈悲深い女性たちに向けて」と題された回覧文書は、当時のインディアン国家が置かれていた苦境に対して、人間的な慈悲心を持つ人々はただちに関心をもって対応する必要があると説いている(Cutter 15)。ここには、後年南北戦争として顕在化するアメリカ南北の亀裂がすでに社会の底流にうごめいていることが暗示されているから、これは、単にインディアン対白人というよりも、南北白人同士の対立を示すものと見ることもできる。だが、例えばリディア・マリア・チャイルドのような作家が、一八二四年出版の『ホボモク』(*Hobomok*)で白人女性とインディアンの男性の結婚を描いて、インディアンに同情的な物語を世に問う土壌はあったのである。ここで重要な事実を確認しておくべきであろう。インディアンをめぐる問題と新しい人道主義的感性は、女性という存在と密接に関連して出現してくるのである。

思えば十九世紀は、大西洋の両岸で女性の神格化が行われた時代であった。一八五四年にイギリスで出版されたコヴェントリー・パットモアの物語詩『家庭の天使』はパットモアの妻への愛を謳い「女性の理想化」を決定づけた作品であるが、これはアメリカで爆発的に人気を得て広く読書界に浸透した。のちに論じるホーソーン家でも愛読書であった。それはアメリカに熱烈に存在した「女性の神格化」、バーバラ・ウェルター言うところの「女性崇拝(The Cult of Womanhood)」の風潮に確固たる表現を与えた作品であったといっていい。女性はその道徳性と清純性によって、汚れることのない精神性の象徴となり、それは家庭の中心にあってその道徳性を守ってくれる「天使」となったのである。家庭の外にある権謀術数の渦巻く政治の世界や弱肉強食の資本主義経済の世界の及ばない聖域、それが家庭であり、その道徳的支柱が女性ということになったのである。これはよく知られた事実であろう。

このように十九世紀アメリカでは、とりわけ女性が精神文化の極めて重要な部分を占めるようになった。アン・ダグラスいうところの「アメリカ文化の女性化」である。これより以前、十八世紀のカルヴィニスト的、また農本主義的世界の中では、人々の精神を導くのは牧師たちの役割であり、その地位は安定して尊敬を集めるものであった。一

方、それまでの女性たちはむしろ家庭の農業の担い手として重要な役割を得ていたのである。しかし、一八三〇年ごろまでには、産業革命の進展によって社会に対する政治・経済の支配力が強まり、カルヴィニズムの衰退とともに牧師たちは地位を失っていく。そして、それと歩調を合わせるように女性たちもまた、男たちが労働の現場を家の外の工場に移していくに伴い、家庭内の労働力としての役割を奪われていくのだ。

この過程の中で、牧師たちと女性たちの地位に大きな変化が生じる。両者ともにアメリカ社会の中心から追いやられ、没落していくのである。しかし、そのままでは終わらなかった。この両者は、資本主義的社会の男性的な支配構造の中では等閑視された道徳の領域に活路を見出し、人々の感情の領域にその再生の場を求めていくのである。牧師たちと女性たちは結託し、とりわけ勃興期にあった文学を媒介として「女性性」を道徳性や感情の至高性と同一化させていく。このようにして、アメリカの文化が強力に「女性化」されていったというのがダグラスの議論であった（Douglas 17-79）。国家の道徳そのものが女性によって体現される文化がそのようにして形成されていく。

国家の道徳的理想が女性によって体現されるというのは、もちろんアメリカから始まったわけではない。例えばフランスでは一八三〇年七月革命の後に

図 3「民衆を導く自由の女神」ルーヴル美術館蔵

図 4「アメリカの進歩」米国議会図書館蔵

ウジェーヌ・ドラクロアによって有名な「民衆を導く自由の女神」が描かれている（図3）。この女性はマリアンヌという名で知られドラクロアの愛人をモデルにしたとされるが、片手に三色旗、またもう一方の手に銃を抱えている。この女性がフランスの自由、また国家そのものを象徴したものであることは定説である。

アメリカにも似たような絵がある。それは一八七二年、ジョン・ガストという無名の画家が描いた「アメリカの進歩」と題する絵である（図4）。マニフェスト・デスティニーという言葉を掲げて西部を征服していくアメリカそのものを描いた絵であるが、その女神はといえば、まさにこの時代のアメリカにふさわしく片手では電線を抱え、もう片手では学校の教科書と思しき本を抱えている。ローマ風の衣服をまとっているのは、古代の共和制の理想を体現するアメリカを象徴しているからである。このように、国家そのものが女性によって体現される文化は広く欧米世界に浸透していたのであるが、アメリカにおいては、ことさらに女性が国家やその文化的、道徳的側面を体現する度合いは大きかったといわなければならない。

Ⅱ　マニフェスト・デスティニーの拡張主義と女性の役割

ハナ・ダストンの事件が百年以上の忘却の時を経て、十九世紀になって急に掘り起こされ国民の間に広く流布するようになったのは、以上の事実を考慮すると意味深いといわなければならない。それはある必然によって起こったといってよい。ハナ・ダストンの事件は、インディアン、暴力、女性という三つの時代の大問題が極めて複雑な、しかもそれまでにない斬新な様相を呈しながら結びついていったことを象徴するにふさわしい典型的な事件だったからである。

例えば家庭の天使、あるいは道徳的理想また清純を体現する女性が、野蛮で凶暴なインディアンに襲われて捕虜となる、あるいは殺害されるというイメージは、それ以前にも人々の間ではよく知られたイメージであったろう。メア

リー・ローランドソンの捕囚記などはその典型で、無垢の白人に対して凶悪なインディアンという図式をこしらえる上で格好のイメージを提供した。しかし、ハナ・ダストンの事件は、母でもあるハナがインディアンに乳飲み子を殺されて捕らえられるという従来の図式をなぞりながらも、同時に、逃亡脱出のためとはいえ、インディアンの家族を、そして異人種とはいえ子供たちを殺し、果ては頭の皮まで剥いで持ち帰るという女性を描き出した。ハナ・ダストンの事件が忘却の淵から救い出されるということは、そういう状況の中に社会が何か新しい意味を見出したことを物語っているのである。いや、より正確にいえば、社会が自らの葛藤を和らげる新たな偶像を必要としたということかもしれない。

この物語が掘り起こされた時代は、いうまでもなくマニフェスト・デスティニーの時代であった。西部への領土拡大が急激な勢いで推し進められ、その過程で白人によるインディアンの制圧、そして居留地への囲い込みや移送が大規模で行われた。当然、インディアンは野蛮で凶暴な種族として憎まれ蔑まれた。しかし、同時にこの時代は、前述のごとく、アメリカの国家としての道徳性が厳しく問われた時代でもあった。最大の原因は黒人奴隷制度であったろう。独立宣言その他で自らが民主的で自由・平等を旨とする国家であることを謳い、高潔な理想を掲げる国が、一方では黒人を家畜のように売買し、その自由を奪い白人のもとに隷属させている。それでいいのだろうか。それは人間として、何よりアメリカ人として許されないことではないのか。北部を中心として巻き起こった奴隷制廃止運動は、そうした意見の代表であった。そして、これは新しい人道主義の時代であった。そこでは、女性がアメリカの道徳性と緊密に結びつけられていたこともすでに論じたとおりである。

こうしたマニフェスト・デスティニーの時代、アメリカはまるで燎原に広がっていく火のように西部の土地とそこの先住民を制圧していった。それは、国家としての国是であり、その必要性を疑問視することは許されない巨大な動きであった。しかし、その水面下ではすでに上で見たように静かだが深い懐疑、あるいは無垢のインディアンを蹂躙する自らの国家の姿勢に対する罪意識のようなものが醸成されていたこともまた疑いの余地がない。西部を制圧して

いく軍事力は、もちろん男性の領分である。女性たちは銃後で家庭を守り、子供を育て、精神的には道徳的な支柱となって男たちを支える存在であった。つまり、女性は、そうした暴力的なマニフェスト・デスティニーの罪深さとは直接かかわらない場所に置かれていて、同時に、その神聖さを保持すべきことが求められていたのである。そうした家庭の領分において、男たちの罪深さもまた考慮されるようになる。それが、女性たちを中心とした新しい人道主義的感情の誕生であったろう。

しかし、インディアンは凶暴であり、実際アメリカ白人の家庭を襲って女性たちにも暴力を加えるということも多発していた。だとすれば、そうした女性たちが、道徳的な本性を維持しながらも、自ら武器を取り、野蛮なインディアンたちから身を守るために武器を取ることは仕方がないことではないのか。女性たちもまた、自らの純潔や道徳性を守るために暴力と呼ばれる行為に手を染めることはやむをえないことではないか。この時、大きな意味の変容が起こる。男性たちがインディアンの土地を力で制圧する行為には政治的な支配力と経済的な貪欲さが顔を出している。しかし、女性が自らを守るためにやむにやまれず行ったインディアン殺害は、許容できるもの、男たちの蛮行に比べれば罪深さは大幅に軽減される行為ではないのか。ハナ・ダストンの事件が一世紀の沈黙を経て再び注目されるようになった背後には、おそらくこのような事情がある。

さらには、国家そのものが、男性的なイメージではなく、女性として想起されたらどうであろう。女性によって導かれるアメリカが、インディアンたちを殺戮していく構図は、それまでとは違った意味合いを持つのではないか。そこに注目したのが、バーバラ・カターによる卓越したハナ・ダストン事件解釈である。カターによれば、ハナ・ダストンは一八三〇年代から一八八〇年代まで、いわゆるインディアン問題が続いていた時代に、野蛮かつ暴力的なインディアンに対して無垢な、有徳の、防衛的な国家が反撃の暴力を加えざるを得なかった状況を肯定する完璧な象徴であったという（Cutter 26）。

マニフェスト・デスティニーの西部制圧を通してアメリカの暴力性は一見したところ否定できない。しかしアメリ

カは本来、道徳性を保持する国家であって、それが暴力に手を染めるというのは、やむにやまれず行われた行為なのである。ハナ・ダストンの例を見よ。有徳な女性、そして何より母親でもある女性が、インディアンたちに捕囚され子供を殺されたのち、自らの解放のためにインディアンを殺害したとしても誰にそれを責めることが出来よう。いや、これこそがアメリカの母たるものの姿なのだ。サミュエル・ナップは一八二九年出版の『アメリカ文学講義』の中でハナ・ダストンを「女性的英雄性」の具現と讃え、彼女のように有徳な女性の果敢な勇気こそアメリカの存続の要だと説いているのである（Cutter 19）。

このようにハナ・ダストンの物語は、まさに暴力を片方で行いつつ、一方では自らの良心の呵責を和らげ、自身の道徳性を堅持したいアメリカにとってうってつけの物語であった。カターは、ダストンの物語が、このようにアメリカの拡張主義、つまりインディアンの土地への、そしてメキシコへの拡張を正当化する物語として使われたと述べている（21）。それは多くのアメリカ人がこの人物を有徳な女性ととらえたこと、また、インディアンの強制移住やインディアン戦争に対する道徳的問題を彼女によって正当化した、ということを物語っている（Cutter 26）。これは実に興味深い、そして説得力のある議論であろう。

しかし、ここでこの事件の十九世紀的意味をさらに深く読み解くために、もう一つの議論を紹介したい。それは、エイミー・カプランの「明白なる家庭性」（"Manifest Domesticity," 1998）という論文にある議論である。カプランといえば、帝国主義と文学の関連をめぐっていくつもの先鋭な議論を展開してきた研究者として知られるが、この論文は出版年の一九九八年、それが掲載された『アメリカ文学』（*American Literature*）の年間最優秀論文を受賞した。

まずはじめに言っておきたいのは、この論文はハナ・ダストンの事件には全く言及していない。したがって、今私たちの主要テーマとは直接関連がない。しかし、この論文は十九世紀前半における女性と国家のかかわりについて実に斬新な視点を提供してくれる。それは一言でいえば、アメリカの帝国主義的領土拡大、具体的にはマニフェスト・デスティニーの運動とは、家庭に閉じ込められた女性と無関係な、もっぱら男性的なビジネスだったのではない。そ

れどころか、実は女性の宰領する家庭の領域こそが、その領土的拡大の中心的道徳エネルギーになった。有徳性・道徳性を体現する女性たちは、家庭に閉じ込められた家庭の天使だったどころか、実は家庭を飛び越え、国家の外側にさえ進出していく力の源泉であり、異国、異人種、異文化を侵略・併合する上で重要な道徳的かつ戦略的なフォーマットを提供したという驚くべき議論なのである。

ドメスティック（domestic）という言葉が家庭と国内という二つの意味があることからわかるように、ドメシティシティ（domeciticity）という領域は実は、自然、野生、また外国を征服した後に確立される領域のことなのだ、とカプランは言う。家庭という意味のドメシティシティは女性の領域であり、それは外部の男性社会と対立する概念であったが、ドメシティシティを国家の枠組みとして捉えると、そこでは男性対女性という構図は消えて、男女が協力して外国、foreign なものに向かい合うための領域となる。その外部に存在する異人種や異文化を制圧することこそドメシティシティの確立であり、ゆえにそれは文明と野蛮を区別する指標となるのだ。この点においてドメシティシティとは文明化することによって領土を拡張するという帝国主義的プロジェクトに他ならない。そして、国家を家としてみなす見方を重視すると、家の中心である女性とは国の形と外国との境界を規定する重要な役割を持った存在となる、とカプランは言うのである（Kaplan 582）。

ドメシティシティという言葉が、家と自国という二つの意味を持つことを単に恣意的に解釈してこの議論が出来上がっているのではない。その証拠にカプランは、家庭の天使などのドメスティックの言説の発達は、マニフェスト・デスティニーの言説が出現するのと期を一にして出現していることを指摘している（583）。ドメスティックな領域というものは固定したものではなく動くものであり、それが動くと同時に「家庭・国家」の領域を規定し、その領域の境界と拡大を決めていくものなのだ。家庭というドメシティシティのロジックは、一八四〇年代と五〇年代の国家拡大（manifest destiny）という一見対立する事情に依存し、またそれを再生産する役割を負っているというのである（586）。

この事実を踏まえて改めてハナ・ダストンの事件を見直すとどういうことになるのか。それは、単にインディアンを虐殺し、頭の皮を持ち帰った勇猛な植民地女性の捕囚物語ではない。マニフェスト・デスティニーの時代にあって、その事件が呼び戻され、ハナ・ダストンの像が建立されたのは、まさにこの時代の人々が、国家の大義であるマニフェスト・デスティニーの動力エンジンの中心において、家庭というドメスティックな領域を宰領する女性が無関係どころか、実は深く関わっていることを直感的に感じていたからであり、ハナ・ダストンこそは、まさにそうしたアメリカの人々が感じていた女性の力を体現する存在だったからではないのか。

これは、前述の女性の道徳性が暴力的な国家の拡張主義の罪を拭い去る役割を負ったという議論と対立するものである。そうではないのだ。まさに女性の家庭の領域設立の仕方そのものが、そのまま国家拡張の理念の中身を形成しているということなのである。ハナ・ダストンは家庭から無理やり引き離され誘拐されても、母という聖なる存在のゆえに殺された我が子の復讐を行い、インディアンたちを殺戮して帰還した。それは、まさに家の外の世界にドメスティシティの空間を再現した行為であり、将来のインディアン制圧、つまりマニフェスト・デスティニーという大プロジェクトを自ら予兆し実践した女性としてハナ・ダストンは意味を持ったのだ。ハナ・ダストンこそは、カプランの言うように、「国の形と外国との境界を規定する重要な役割を持った」女性の象徴だったのである。

Ⅲ　ホーソーン、ハナ・ダストン、そして「家庭」の神聖さ

ダストンの物語が、十九世紀に再び脚光を浴びるようになった契機として、数々の本や雑誌がこの物語を扱ったことは前に述べたが、ここで取り上げようとするナサニエル・ホーソーンもまたその「ダストン一家」（"The Duston Family," 1840）という短い、スケッチ風作品を雑誌に発表している（図5）。当時の文学者がいかにこの歴史的素材を用いた物語を書くに至るかを考える上で、少し当時の状況を探ってみよう。

ホーソーンは、一八三六年年頭から八月まで、かねてから関係の深かった編集者サミュエル・グッドリッチの依頼によって、『アメリカン・マガジン』（*The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*）という雑誌の編集をすることになった。大学を出て以来いわば引き籠るように暮らしていたセイラムの実家を離れ、ボストンに出てきたのである。ときにホーソーンは三十一歳。それまで様々な雑誌に短編を掲載するも、約束された報酬が支払われないなど出版社に不満を募らせたホーソーンは、この雑誌も引き受けるのは気が進まなかったが、年五百ドルという約束で引き受けた。（一八四〇年の一ドルは今のだいたい三十ドル。だから一万五千ドル、百五十万円くらい）。「ダストン一家」はその五月号に掲載された作品である。

OF USEFUL KNOWLEDGE. 395

The Escape of the Duston Family.

THE DUSTON FAMILY.

Goodman Duston and his wife, somewhat less than a century and a half ago, dwelt in Haverhill, at that time a small frontier settlement in the province of Massachusetts Bay. They had already added seven children to the human race, and were now, Goodman and Mrs. Duston about a week before the period of our narrative, had blessed her husband with an eighth. One day in March, 1697, when Mr. Duston had gone forth about his ordinary business, there fell a heavy misfortune upon the house of this poor man. And in a whole-hearted fashion. An Indian war party, after traversing the wilderness forest all the way from Canada, broke in upon their peaceful and defenceless home. Goodman Duston heard the war whoop and hurried home, but he was too late to save his family. He had scarcely time to look after the safety of his family. As he dashed along, he beheld dark wreaths of smoke ascending from the roofs of several dwellings near the road side, while, the groans of dying men, mingled with the shrieks of women and the wailings of children, pierced his ear, all mingled with the triumphant yell of the raging savages. The poor man trembled yet sprang on to reach the house, deeming that he should find his own cottage on a blaze, his wife murdered in her bed, and his little ones hurled into the flames. But, crossing near the door, he was intercepted by a party of Indians, who had seized his wife, and were carrying her off together with numerous other captives, from the house. The father only looked upon the retreat of their way to their rejoicing glorious, and, without a moment's pause, flung himself from his home, and rushed into Mrs. Duston's bedchamber.

The good woman, as we have before hinted, had lately added an eighth to the seven former products of her husband's loins, and was now, poor soul, confined in her room, and her nurse, the widow Mary Neff, watching by her bedside. Such was Mrs. Duston's helpless state, when her pale and beautiful husband burst into the chamber, fainting, her nurse, and her infant, in his arms, and bearing with the swift rate of his course, where the Indian yell was heard, and during which out of the window, Goodman Duston saw that his blunderbuss for was close at hand. At this critical instant, it appears that the Indian, who had the unfortunate Duston so decisively upon his hands, was so quite forgot the still more precious situation of his wife; or, as is not improbable, he had such knowledge of the good lady's character, as afforded him a comfortable hope that she would not be taken alive. Accordingly, with a whole tribe of Indians, flourishing their tomahawks, he seized his gun and rushed out of doors, as if meaning to gallop after his newly stolen children, and snatch up one of them in his flight, but for whole one of the savages, who had left Duston from the room, in that fatal hour. With this idea, he rushed up to the door, and, as he reached it, he saw, at this time, six stout Indian rush from the house, all pressing forward in a group, and through the passage children repaired and abundant, yet the other were

Co gle

図 5 “The Duston Family,”
The American Magazine 所収

この雑誌は、ベウィック社という会社の出版で、グッドリッチはそこの役員でもあったが、雑誌はホーソーンが自由に素材を選んでいいものではなく、会社が記事の内容を決め、ホーソーンは会社から与えられた木版画の図案にふさわしい内容の記事を書くというものであった（Mellow 71）。この会社は自ら保有する版画を雑誌で紹介したいという思いもあった。まことに憂鬱な仕事、しかも雑誌の内容をすべて一人で書かなければならない忙しさにホーソーンは辟易したものの、時には版権のないことを幸いにワーズワースやチャールズ・ラムなどの英国作家作品をそのまま載せたり、セイラムにいる姉のエリザベスの助けを借りてセイラム図書館から借りた本の抜粋などを作って送ってもらったりしてなんとかしのいでいた。「ダストン一家」もまたそんな状況の中、会社あるいはグッドリッチから与えられた図案に説明を付け加える形で書いた作品である。このようにホーソーンの場合にも明らかだが、当時のアメリカの文学者と歴史的素材との出会いは、作家個人の嗜好というよりも、出版社や時代の要請によることが多かった。そ

の分、文学者の作品は、社会や時代の直接的な欲求を映しているのである。

さて、そのハナ・ダストンの物語をホーソーンはどう描いたのか。『アメリカン・マガジン』の記事を書くにあたってホーソーンが主に利用したのが、まずは、サミュエル・グッドリッチが自分が発行した雑誌『ピーター・パーレイの子供に世界史を教える方法』(*Peter Parley's Method of Telling About the History of the World to Children*, 1832)に書いた記事であった。ホーソーンはこの記事で事件の要約を確認し、この本で使われていたダストン事件にまつわる版画の拡大版をつけて「ダストン一家」を書いている。資料として参考にしたのは、コットン・マザーの『マグナリア・クリスティニ・アメリカーナ』にあるこの事件の記録とB・L・ミリックの『ハーヴァーヒルの歴史』(*The History of Haverhill*, 1832)であったことが分かっている(Cohen 236-7)。マザーはこの事件ののちそれほど時を経ずにハナ・ダストンと対面し、直接話を聞き取った上でその事件を書いているので資料としては最も信憑性が高い、とされる。一方ミリックの記録はホーソーンと同時代のものであり、マザーのものとは異なる時代の解釈を映し出して興味深い。これらの資料は、それらが伝える事件の内実だけではなく、後に述べるように、その事件の語られ方においてもまたホーソーンに影響を与えたと思われる。

ホーソーンは「ダストン一家」をいわば型どおり紹介することから始めている。今からまだ一世紀半も前ではないが、マサチューセッツのフロンティアの村に夫婦と八人の子供を持つこの家族が住んでいた(実際は九人)。そして、一六九八年三月のある日、カナダからやってきたインディアンの一隊がこの村を襲った、という具合である(ホーソーンは、事件の年を一六九七年ではなく一六九八年と記している)。まず、はじめに紹介されているのが夫のトマス・ダストンであることは注目に値する。インディアンに実際襲われて捕虜となったのは妻ハナであり、しかも、赤ん坊を数日前に産んでベットに伏している状態であったにもかかわらず、そして、何より歴史に名を残したのはハナであったにもかかわらず、ホーソーンは夫トマスの行動に共感を持って書いているのだ。家を離れて仕事をしていたトマスは、ことを聞きつけて馬を駆って家に戻る。トマスは、荒々しいインディアンの暴行で阿鼻叫喚の叫びをあげる村人

たちの中を、自分の家は焼かれ妻は殺されているのではないか、子供たちはすでにその火の中に投げ入れられているのではないか、と心配しつつ馬を駆った、とホーソーンは書いている（132）。

家に近づいてみると、七人の子供たちは家から飛び出し、父親めがけて駆け寄ってくる。それで一安心のトマスは、妻ハナの寝ている寝室に行き一緒に逃げるように諭すが、窓の外にインディアンの一行が近づいてきているのを知る。ホーソーンは次のように書いている。

> 激情に駆られて窓の外を見てみると、ダストンは血に飢えた敵が手近に迫っているのが見えた。この恐怖の瞬間、彼の子供たちの危険を思う気持ちが彼の心に強く押し寄せ、さらに危険な状態にある妻の状況をすっかり忘れたように思われる。あるいは、ありそうなことだが、彼は夫人の性格をよく知っていたので、彼女はインディアン部族全体と戦ったとしても何とか持ちこたえるであろうという期待をこめた希望を持ったのであろう。（132）

ハナの性格の荒々しさがここで示唆されているのだが、それにしても、現代の読者であれば、ここで妻ハナを置き去りにした夫トマスに疑問符をつけたい衝動を抑えきれないかもしれない。しかし、何よりも子供たちの安全を考えたということにホーソーンが賛同を示しているのは明らかであり、これは前述の『ハヴァーヒルの歴史』を書いたホーソーンの同時代人ミリックも同様なのである。ホーソーンの記述を追っていくと、ダストン夫妻トマスとハナはもちろん男女の夫婦であるのだが、過酷な運命に打ち克ち、インディアンを殺害するハナは男性的であり、それに対して、トマスは夫ではあるが、むしろ、母の優しさをもって描かれていると言えるのではないだろうか。何よりも子供の安全を願うというのは、まさに母の願いに他ならないであろう。つまり、ホーソーンの描くトマスとハナの夫妻像では伝統的な男女の役割が逆転し、それが強調されているのである。この点はホーソーンのダストン論の重要な特質として銘記しておかなければならない。

もちろん、ハナに対する同情もないではない。とりわけ、ハナが生まれたばかりの赤ん坊を目の前で殺害される恐ろしい場面の描写には、それがはっきりと感じられる。家からインディアンたちに連れ去られる際の様子は次のように描かれている。

> 彼らが家から出ようと敷居をまたごうとした時、その哀れな赤ん坊は弱々しい泣き声をあげた。それこそが死の叫びであった。その瞬間一人のインディアンが赤ん坊の足首をつかんで宙に振り上げ、一番近くにあった木の幹に頭を打ち付けて打ち砕き、その小さな亡骸を母の足元に放り投げた。ハナに復讐の時が訪れた時に、彼女のこころを無慈悲にしたのはその瞬間の記憶だったかもしれなかった。しかし、今は悲しみと怒りを胸にとどめインディアンの後について暗い森に入っていくしか仕方がなかった。燃える我が家に別れの一瞥を投げることもほとんどままならなかった。その家こそは彼女が夫と幸福に暮らし、彼のために八人の子供を産んだ家だったのである。今やその七人の子供たちの運命を彼女は全く知る由もなく、あの幼子は、たった今、目の前で殺害されるのを見たばかりであった（134）。

ここまではホーソーンはハナに対し少しの反感も持っていない。それどころか、彼女が経験しなければならなかった過酷な運命に対し深い共感さえも寄せている。夫や子供と暮らした家から引きずり出され、今火がつけられた家を悲しみをもって振り返るハナは、どこにでもいる母親そのものに他ならないであろう。しかし、家の外に連れ出された彼女は別人格を帯びるようになる。彼女は「荒れ狂う雌虎」（136）と描かれるようになるのだ。その具現化がインディアン家族の殺害であることは言うまでもない。引用中、ハナが家の敷居をまたいだ点が指摘されているのに注目したい。ホーソーンの女性人物たちは、この敷居をまたいで外に出ると禍が生じるように書かれることが多い。「若いグッドマン・ブラウン」（"Young Goodman Brown," 1835）の清く美しい新妻フェイスも物語のはじめで「敷居に」立っ

ていたことが思い出される。彼女もまた敷居の内側では理想的な妻であったが、家の外にでて森に現れる時は、もとのフェイスではなく、悪魔の夜会の参加者なのである。

ハナはやがてインディアンの殺害に手を染めることになるのだが、その前に森の中を長い距離歩かされ、やがてあるインディアンの家族に割り当てられることになる。ここで、ホーソーンがそのインディアンたちをどう描いているかを見ておくことにしよう。この家族は頑強な男二人と女三人、それに七人の子供たちからなっていた。アベナキ族がフランスと同盟を結んでいたことを思い出しておきたい。特徴的なのは、この家族がフランス人たちとの関わりからカトリックの信仰を持っていたということである。朝、昼、晩と三度の祈りを欠かさず信仰心に厚かったことをコットン・マザーも書きとめている。ホーソーンはここでマザーにも言及し、この「老いた無慈悲の、博識な、自らの宗教に凝り固まった頑迷な人物」(135) は、このインディアンたちのカトリック信仰のゆえもあってこの異人種たちが殺されたのを喜んだであろうと推測している。ホーソーンのコットン・マザー嫌いがはっきりと感じられる描写である。しかし、ホーソーン自身のこのインディアン家族に対する態度はまったく異なっているのである。

ハーヴァーヒルの村を襲ったインディアンに対して、ホーソーンは、「血に飢えたインディアン」、「野蛮人」、また「赤い悪魔」(133) と呼ぶなど、当時の平均的な白人のインディアン観を反映するような呼称を用いてその戦闘性と暴力性を非難している。それに対して、ここの家族に関しては、その信仰に好意を持ち、この家族が「平和な炉辺の家庭の慣例に従って、家庭の信仰 (domestic worship)」を維持しているのは感動的だと述べているのである (135)。ホーソーンはここで明らかに肌の色を超えて、同じキリスト教徒、そして同じ人間としてこの家族を見ているのではないだろうか。ここにインディアンの家族が「家庭の信仰」という言葉と結び付けられていることに注意したい。ホーソーンにとっては、人種にも増してこの家族のうちに「家庭の」信仰と領域があったことが大事だったようにも見える。

ハナが殺害したのは、この家族だったのである。すると最初のハナに同情的な調子は一変、ホーソーンの彼女に対

する態度は激しい非難を極める。殺害の描写の後、ホーソーンは次のように書いている。

> その（殺害）行為が終わった後、ダストン婦人は（インディアンの）戦士たち、女性、そして子供たちの長い黒髪をつかみ、十人すべての頭の皮をはぎ、そして、今日まで彼女の名前がついている島を離れた。私たちの見方からすると、その行為は、彼女にとって忌まわしいものと考えるべきであろう。その血に飢えた鬼のような女はコントクック川を渡るとき溺れてしまえばよかった、あるいは、沼に深くはまり込んで沈み、最後の審判に彼女の犠牲者たちと対面するために呼び出されるまで、そこに埋められてしまえばよかった。あるいは、森の中で迷って飢え死にし、彼女の骸骨以外は、そしてその周りに帯のようにからまる十の頭の皮以外は、もう誰の目にも触れないという状態であればよかったのに！（136-37）

辛辣を極めるとはまさにこのことであろう。今日の我々からすれば、確かにハナ・ダストンの殺戮は暴力的なおぞましい行為ではあるが、彼女の置かれた状況からして同情すべき余地も十分にあり、このように激しい非難を浴びせることは酷なことではないだろうか。従来、この事件をどう解釈するかに関しては、ハナを英雄視する見方と同時にこの暴力、とくに彼女がインディアンの子供たちをも虐殺したという点が問題になってきたことは確かである。興味深いことに、同じようにこの史実を伝えたジョン・グリーンリーフ・ホイッティアの作品の中にはこの殺戮で女性や子供も殺されたシーンは描かれていない。ちなみに、このインディアン家族がカトリックだったということにも触れられてはいない。彼女を擁護する人々も、その暴力性はやはり問題を含んでいると見たのであろう。しかし、そういう事情を勘案しても、ホーソーンのハナ・ダストン批判は際立っている。一体なぜホーソーンは、ハナに対してこれほどの怒りを示したのであろうか。それを最後に考察してみたい。

この問題を取り扱った論文はいくつかあるが、二つだけ紹介しておこう。ひとつはラリー・レイノルズの論である。

レイノルズは、ホーソーンが政治的立場にかかわらず暴力性を何よりも嫌悪したことを述べてきた批評家であるが、この「ダストン一家」解釈においてもその立場を崩していない。それによれば「ホーソーンの平和主義はインディアンたちにもおよんでいるのであり、その点で他の歴史家たちとは隔絶している」という。そして、ホーソーンは「正義の暴力とか殺害による復讐を正当な行為としては受け入れない」と論じているのである（Reynolds 27）。つまり、ハナ・ダストンの行為は何よりもその暴力と残虐性によって受け入れられないものであり、それはけっして正当なものとみなすことができない行為であったというのがレイノルズの見方である。

もうひとつは、二〇〇一年『ナサニエル・ホーソーン・レヴュー』に掲載されたシンシア・ブラントリー・ジョンソンの説である。これはホーソーンの辛辣な批判の意味をより深く論じたもので、何よりもこの事件そのものというよりも、そのコンテキストの重要性に注目した点で優れた論文である。結論から先に言うと、ジョンソンは、ホーソーンのこの辛辣な態度は、ハナ・ダストンの残虐性はもちろん、この話が流布した経緯がコットン・マザーの著作にあったことに原因があるとしている。そもそも、コットン・マザーが書かなければハナ・ダストンの話は存在しなかった。したがって、ハナ・ダストンとはこの神学者の創造物なのだ、とジョンソンは言う（Johnson 31-32）。ホーソーンが自身の先祖も関係したセイラム魔女裁判のこともあり、マザーという神学者を嫌悪していたことはよく知られている。そのマザーは生涯を通じて、ニューイングランドがイスラエルの再現であり、アメリカ植民地人たちは「荒野への使命」へと使わされた神の選民であると説いた人物であった（21）。

ハナに関してもマザーは彼女を聖書中の女性ヤエルにたとえている。ヤエルはイスラエルの敵であるカナン人の将軍シセラを殺してイスラエルを救った女性として記憶されるが、ハナ・ダストンをヤエルにたとえることで、ハナはニューイングランドをインディアンという敵から救った英雄に祭り上げられた。ジョンソンによれば、マザーのハナをヤエルにたとえる記述は聖書の表現をそのまま使用しており、その延長線上でマザーのハナ・ダストン礼賛は、アメリカの歴史を聖書の文脈によって肯定しようとする将来のマニフェスト・デスティニーにまっすぐにつながるので

ある（22）。ホーソーンは、ハナ・ダストンがこういうマザーの策略の道具になったことが許せなかった、というのがジョンソンの結論である。ハナの物語は語られなければよかったし、彼女は可視化されるべきではなかった（31）とホーソーンは思ったというのである。

いずれもきわめて説得力を持った議論であり、特にそれ以上付け加えることはないようにも見える。しかし、ホーソーンのハナ・ダストンに対する辛辣な非難の理由が、インディアン家族が「家庭の信仰」を大事にし、ハナはその領域で殺戮を起こしたことにあった、という暗示を今一度思い出しておこう。ホーソーンにとっては、この家庭の領域を犯すことが、しかも、本来家庭を守るべきはずの女性によって、その神聖な場が蹂躙されたことが許せなかったのである。ドメスティック（domestic）という言葉は、それほどまでにホーソーンには重要な言葉だったのである。

ここでもまた浮上してくるのが、エイミー・カプランが提示した女性やドメスティシティという家庭のディスコースと十九世紀アメリカの原動力としてのマニフェスト・デスティニーとの隠された、しかし、親密な関わりではないだろうか。前述のように、カプランはハナ・ダストンの物語、また、ホーソーンに関して全く言及していない。だが、カプランの理論を下敷きにしてこの事件を見てみると、ハナ・ダストンの事件とは、まさに女性が家庭という女性の聖なる領域から連れ出されて、公的な社会的文脈、また国家的プロジェクトの中に静かに、しかし着実に組み入れられていく様子を予見的に映していたといえるだろう。コットン・マザーがそのハナ・ダストン像の契機を作ったというのは間違いではないだろう。しかし、十九世紀の文脈は、その動きをさらに強力に助長するものであった。古き良き「家庭」は静かに解体し、女性の名において他民族、また他人種に対する暴力が正当化されるということまで起こっていたという現実があったのである。これは、まさにドメスティックな領域に対する冒涜に他ならない。

さらにもう一つの事実を付け加えておこう。それは一八三〇年代以降、いわばジャクソン時代のアメリカとは、家庭において男女の役割が急速に逆転していく時代なのである。表向きは強い男性、父が外で働き、「家庭の天使」としての女性が母として家や子供を守る。しかし、すでに述べたように、女性は道徳的理念の権化として社会や改革運動

に進出していく。そして、その存在感を強めていくのである。それにつれて女性の個人主義や社会参加に対する懸念が表面化してくる。したがって、ジャクソン時代、女性の強権化と男性の役割の弱体化が、家庭と国家の両方で表面化してきたのだとアン・マリー・ワイスは述べている（50）。

つまり定説とは異なり、ジャクソン時代のアメリカとは父親中心の家庭制度が急速に崩壊の様相を見せていた時代であったのだ。そういう時代には、文学にもまたそうした風潮がはっきりと刻まれることになる。例えば、ジョン・ニールやウィリアム・ギルモア・シムズのような作家は、か弱い女性が吸血鬼になり血を飲むさまを描いたが、これはその時代の恐ろしい母、女性の肖像であったとワイスは論じている。またマイケル・ロギンの説を紹介しながら、この時代に流布したカニバリズム（人食い）の言説は、家庭的な女性がもしも完全な自由を与えられたら行うかもしれない行為についての男性の恐れを表現しているとも言っているのである（51）。

すでに強調したように「ダストン一家」においては、夫トマスと妻ハナとの描き方において、男女が逆転している。そして上に見たような時代的コンテキストを頭に置けば、このスケッチ風小品が時代の悩みと不安を実によく表現していることが見て取れるだろう。男が戦争に行き、暴力的戦いを演じるということをホーソーンが良しとしたわけではない。しかし、戦争や領土拡張という「男性的事業」に女性がかかわり、しかもその女性性によって暴力を隠蔽し、また女性そのものがゆがめられていくことが持つ道徳的な意味合いをホーソーンが恐れていたのは確かなことのように思われる。インディアンに対してはもちろん、女性や国家に対してさえホーソーンがどのようなスタンスを保持していたかを考える上で、「ダストン一家」は興味深いテキストであろう。同時にそれは、十九世紀のアメリカ文学が歴史にどのように関わったかを示す例証でもあった。

拙稿を閉じるにあたって、最後にハナ・ダストンの事件に関して最近の動向をひとつ紹介してみたい。イギリスの新聞『ガーディアン』紙は二〇二〇年八月三日、ボスカーウェンのダストン像についての記事を載せた。近年アメリカでは歴史の見直しの中で、過去に奴隷制を擁護した南部の偉人や少数民族を抑圧した過去を持つ人物の像が攻撃さ

図 6　The Guardian 紙, August 3, 2020 号掲載

れたり、撤去を求められたりという動きが相次いでいる。ハナ・ダストン像に関してはさほど当初は問題にならなかったようであるが、ついに二〇二〇年七月、ハナ・ダストンの故郷ハヴァーヒルの市議会がダストン像を問題にしはじめ、アベナキ族の末裔、ダストンの子孫まで巻き込んだ論争に発展した。そして、市議会で議論が開始された直後、ボスカーウェンのダストン像が何者かによって攻撃され、血を連想させる赤いペンキがかけられた（図6）。こういう風潮を踏まえ、ボスカーウェンでは、ダストン記念像という名前を変え、その像の周りにアベナキ族などの像を加えるという解決策を打ち出しているという。この動きに代表されているように、近年、アメリカの歴史の意味が大きく問い直されている。植民地時代も例外ではない。アメリカの人々は、そうした過去までも含めて、自分たちは誰だったのかを問い直し始めている。ハナ・ダストンの物語は、今後もアメリカを考える上での大きな指標であり続けるだろう。

＊この論考は平成三十年度専修大学中期研究員制度の成果の一部である。またＪＳＰＳ科研費 JP21H00512 の助成を受けている。
＊本論考は日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部研究会（二〇二一年二月二七日：Zoom 開催）での口頭発表に加筆したものである。

参考文献

Atkinson, Jay. *Massacre on the Merrimack: Hannah Duston's Captivity and Revenge in Colonial America*. Lyones P. 2015.

Barbara Cutter. "The Female Indian Killer Memorialized: Hannah Duston and the Nineteenth–Century Feminization of American Violence." *Journal of Women's History*, vol. 20, no. 2, 2008, pp. 10–33.

Cohen, B. Bernard. "The Composition of Hawthorne's `The Duston Family.'" *The New England Quarterly*, vol. 21, no. 2, 1948, pp.236-241, doi:10.2307/361752.

Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. Noonday Press/Farrar, Straus and Giroux, 1998.

Hawthorne, Nathaniel. "The Duston Family," *Hawthorne as Editor: Selections from His Writings in The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*. Ed. Arlin Turner. Louisiana State UP, 1941.
* All the quotes from "The Duston Family" are from this book.

---.ed. *The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*. Vol.II. Bewick, 1836.

Johnson, Cynthia Brantley. "Hawthorne's Hannah Dustan and Her Troubling American Myth," *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 27, no. 1, Spring, 2001, pp. 17-35.

Kaplan, Amy. "Manifest Domesticity." *American Literature*, vol. 70, no. 3, 1998, pp. 581-606.

Knapp, Samuel L. *LECTURES ON AMERICAN LITERATURE: with Remarks on Some Passages of American History (Classic Reprint)*. FORGOTTEN Books, 2016.

Mather, Cotton. *Magnalia Christi Americana, Or, The Ecclesiastical History of New-England: From Its First Planting, in the Year 1620, Unto the Year of Our Lord 1698*. Silas Andrus & Son, 1853.

Mellow, James Robert. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Houghton Mifflin, 1980.

Mirick, B.L. *The History of Haverhill, Massachusetts*. A.W. Thayer, 1832.

Reynolds, Larry J. *Devils and Rebels: the Making of Hawthorne's Damned Politics*. U of Michigan P, 2010.

Rowlandson, Mary White, and Wayne Hazen. *Mary Rowlandson: an Illustrated Narrative of the Captivity and Restoration of Mrs. Mary Rowlandson*. W. Hazen, 2009.

Weis, Ann-Marie. "The Murderous Mother and the Solicitous Father: Violence, Jacksonian Family Values, and Hannah Duston's Captivity," *American Studies International,* vol. 36, no. 1, February, 1998, pp. 46-65.

Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly*, vol. 18, no. 2, 1966, pp. 151-174, doi:10.2307/2711179.

Whittier, John Greenleaf. "The Mother's Revenge," *Legends of New England (1831): a facsimile reproduction.* University of Michigan Humanities Text Initiative, 1998.

"Statue of white woman holding hatchet and scalps sparks backlash in New England," *The Guardian*. August 3, 2020. https://www.theguardian.com/us-news/2020/aug/03/hannah-duston-statue-new-hampshire-native-americans. Accessed September 12, 2021